

●いぬふぐり帰るべき家振り返り

新野祐子

いぬふぐり（雄犬の陰囊）の名は、その果実のかたちからという。季語では初春。句は、「友の入院二句」と断りのあるその一句目。この、いぬふぐり、には雑草としての卑小さもあるが、コトバの強度もあって、場面のもつている強度に釣り合う。帰るべき家振り返り、のその振りのセンチメント。直視のもつ酷薄さ、もある。

●囀さえずりや水面に映る昼の星

囀や、ですでにくらかの場所が指示される。そこに昼である。昼間の星、は白い点のようにみえるという。昼の星という逆説。ここではまた水面に映っているので間接の光になる。間接性は作句そのものでもある。

●尾を振りて背黒せくろ鶺鴒せきれいスーパーの駐車場の水たまりにゐる

布宮慈子

背黒鶺鴒は尾を上下に振る。眼にみえている。ただしやや異所でみえている。スーパーの駐車場の水たまり、は、普通に水辺と違う。より大きな生活の場に（街中に）、鶺鴒を持ち込んでゐるのは、現在という時間でもある。そこが面白い。スーパーはこれで十分だが、スーパーマーケット。

青き実をあまた付けつつブルーベリーはかくま匿ひてをり足長蜂を

ある営為、とある営為を結びつけている。生きることを、である。絵本を読んでいるような肯定感。青き実をあまた付けつつ、にもひとつの調子がある。

タイトルは「生きもの」。歌は全体に春の歌である。

夕まぐれ万の蛙のこゑ響き三・一一より遙かに来たり

●頸椎を損傷したる友ありて術後に介護施設へ移る

市川茂子

入院し退院するつどに、要介護度が上がった、ということを知りあいのことに聞いたが、こういうことはあるだろうな、とおもう。余り経過、連絡なしに（ただちに）介護施設、に移ってしまう。というところが現在だろう。元々が高齢なのだろう。歌は、経過そのもののように、直線的だ。次も、おなじ友の歌か。

若きより強き心の友にして見舞に行くも励まされおり

これらは友の歌だが、じぶんの歌ではこうなる。

戻ることなきに生死しよじのひと世なり喜怒哀楽を抱えつつゆく

時間は直線的で、決して戻らない。ひとつの断りでもあれば断言であるようにもひびく。すでに喜怒哀楽を味わった人の歌。それでもそれらを捨てることはできず、抱えつつゆく、なのだ。ある種強さもかんじさせる。

●年々に重機頼みの園にして大きな腕のみつつがうごく

小野澤繁雄

助詞「に」があるので「としどし」と読むほうがいいだろう。重機はブルドーザーやクレーン車、シヨベルカーなどを指す。年ごとに重機を用いて整備するようになった公園で、シヨベルカーなど三機が動いている、と読んだ。「大きな腕のみつつ」は重機のアームを表しており、比喻として効いている。五首目には次の歌。

クレーンも出て櫂倒されそのあとでそらに空洞ができることもなし

ケヤキが倒されるにも理由はあるのだろうが、一般の市民には理解できないこともある。大きいケヤキがなくなったら空にぽっかり穴があいてしまってもいいのに、そうはならないのだなあ、という作者の諦念がにじむ。もやもやした気持ちを「できることもなし」と言い切って、自分を納得させているかのようである。

●四谷より東高野山長命寺に墓を移して五十年経る

河村郁子

一連は「墓所のリフォーム」というタイトル。今回調べてみて驚いた。当初、東高野山は和歌山県にある高野山の総本山の東に位置するのだろうと思いついていたからだ。ずいぶん遠いところに墓を移したものだなあ。ところが違った。東高野山は山号であり、長命寺は東京の練馬区にある

寺だった。作者の住まいの近くに移したわけだ。やっと納得できた。

お墓のことを甥に任せるチャンスだということで、墓石の改造から始まって経過がていねいに描写されていく。墓石の形や御影石の種類まで、詳しい表現は新たな興味を掻き立てる。次の歌は、二つの名字を彫るということで、現代のお墓事情を表しているように思う。

上台に河村と小原の文字を彫り左右の花台に家紋を刻す

●春雷に錠剤ひとつ飲み込みぬ

谷垣満壽子

春雷に驚いて、または春雷に促されて、薬の粒を飲み込んだ。どちらでもいい。春雷の轟きと喉を通る錠剤の怪しさがミスマッチのようでいて、そんなこともあるだろうなと思わせるのが、この句の面白いところ。

料峭れいせうや高みに絵馬をかける子等

季語が難しかった。以前、「増殖する俳句歳時記」という清水哲男さんのインターネットのサイトがあったのだが、そのなかの二〇〇二年二月二〇日の句の解釈から転載させてもらう。

季語は「料峭（りょうしょう）」で春。さて、お勉強。「料」には撫でるないしは触れるの意味があり、「峭」は山がとがっている様子から厳しさの意味があるから、厳しいものが身体に触れること。すなわち、春の風がまだ肌を刺すように冷たく感じられるさまを言った。「春寒（はるさむ）」とはほぼ同義であるが、そのうちでもいちばん寒い状態を指すのだと思われる。（執筆／清水哲男）